The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インド軍持浄瓶に関する研究
Author(s)	權, 相仁
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

インド軍持浄瓶に関する研究

權　　相　仁
慶星大学校

キーワード
軍持，Kundika，浄瓶，双口澡罐，細長頸瓶
添水台，尖台，卵形軍持，下広形軍持，梨形，水羅機能

はじめに
一．軍持の語義
二．軍持の形態（定形）および細部名称規定
三．仏教胎動期のマウリヤ朝軍持形瓶
四．クシャーン朝の軍持
五．グプタ朝の軍持
おわりに

はじめに

8世紀頃を前後にして中国で流行した軍持と称する浄瓶は，添水台と尖台が附着した独特の形態をもつものである。軍持は仏教文化と関連をもった器物であることは確かである。しかし，その起源および用途，特異な構造が定形化した時期，さらにインドから東アジアに伝えられた年代についての詳細はまだ明かになっていない。軍持ということばは仏教経典中の律蔵のところどころに記録されているが，律蔵が記述された時代と釈迦牟尼が生存した時代とは少くとも4，5世紀以上の差異がある。つまり，釈尊が生存した時代には律蔵がなかったので，律蔵の内容は釈尊が作った僧侶の規律ではない。したがって，中国・唐代の軍持の形態は釈尊の在世時から存在した軍持の構造とは同一のものとは考えがたい。

ＢＣ6世紀中頃，インドの既存思想であるバラモン教に反して新しく台頭した仏教と「ジャイナ教」[1]による殺生禁忌の厳格な法があったとしても，その時代には軍持がまだ定型化されてはいなかったといえる。原始仏教時代には経典も荘厳具もなかった時代だったことを推測して見ると軍持が釈迦の生存時代に存在したという律蔵の記録には疑問が残る。発掘記録では，アレクサンダー大王の軍が，インド西北部を侵攻した後に創始した，マウリヤ朝（ＢＣ310－184年頃）の遺跡『タキシラ』から，最初の添水台と尖台がついている器物が何点か出土している。この器物には唐代の軍持と比較すると，すでに軍持の起源的な構造を示す古拙的な原型

を保持しているのが認められる。

1世紀前後，クシャーン朝期に建立された「サーンチー大塔」の遺跡から1990年代に出土した遺品には軍持の添水台・尖台と考えられる破片がある。カウシャーンビー，ソームナート，ラージガート，ルパールの資料を比較すると，クシャーン朝時代にすでにインドでは軍持形の浄瓶がロクロ成形方法で定形化していたことがわかる。中国・唐代に流行した東アジアの軍持の原型が，クシャーン朝時代にすでに定形化され，グプタ朝期の仏教隆盛とともに軍持の使用が活性化したことが，仏像彫刻と仏教絵画によって確認できる。

本論の目的は，クシャーン朝とグプタ朝期の絵画，彫刻および工芸品とに表現された軍持形を比較検討し，唐代の軍持の原形であるインドの軍持を考察することである。

一．軍持の語義

「クンチカ（Kundika）というのはサンスクリツト語の水瓶を意味し，漢語では軍持，君持，軍遅あるいは軍持浄瓶と記録されている。」[2] 本論ではさまざまな形の浄瓶の中，現在一般的に軍持という名称でよばれている「添水台・尖台附着形浄瓶」[3] を考察の対象とする。

(1) 「径中或作軍遅，此云瓶也，謂双口澡罐，律文作鍮鎖非也」[4] のように仏教経典中の軍遅というのは瓶であり，双口澡罐をさすといわれている。つまり，軍持とは添水台と尖台の部分をもっている浄水用の瓶と規定できる。

(2) インド人の「アーナンダ・クマーラスワーミー（Ananda Kumaraswami）」[5] は1929年の論文で，Kundika（Kundi）は瓶の肩部についている流れ（添水台）から水を瓶に入れて尖台で水をのむ容器と規定している。

律蔵に記録された多くの浄瓶あるいは軍持という用語の概念をまとめると，インドにおいてその原型は曖昧に表現されており一貫性が見られない。しかし，上記(1)，(2)の内容は，比較的軍持の形態と用途を明らかにしている。本論では，浄瓶中に添水台と尖台を持ち，双口とよばれる瓶を『南海寄歸内法傳』の「水有二瓶」條に記録された内容を参考として軍持と規定しておきたい。

二．軍持の形態（唐代の定形）および細部名称規定（図－1）

仏教の経典である律蔵，「摩訶僧祇律」に表記された「著嘴」という記録によれば，軍持形の特徴は以下のようになる。添水台は肩部に附着されており，長頸部の上段には，成形する時に固定した蓋の上段部に，排出口あるいは注出口が尖塔のようについている。排出口は上に向って開いているので，必要な場合，この瓶を斜めに傾けてこの部分から水を注ぎ出す。注子の注口のように見える添水台は，瓶の中に水を注入するための機能としての構造であり，蓋の上に

ついている排出口は注口（水を注ぐ機能）の役割をする。

本論では，７世紀末頃の軍持を「水羅機能」[6] として把握した唐の求法僧義浄の『南海寄歸内法傳』から「水有二瓶」條の内容を参考として，筆者が水羅機能に適合するように規定した細部名称を使用する。軍持の用途を「水羅機能」で規定して各部分の名称と機能を整理すると図－１になる。

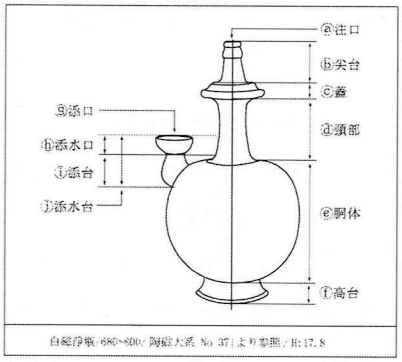


図1

ⓐ注口－軍持に入っている浄水をふりかけたり，飲用時に使用する口。ⓑ尖台－浄水を注ぐ為の機管。ⓒ蓋－瓶の蓋で固定し附着され，添水台として添水時に把手として使用される。ⓓ頸部－細長頸浄瓶の意味をもち，注出時に把手として使用する部分。ⓔ胴体－浄水の貯蔵機能をもつ部分。ⓕ高台－瓶を安置する為の台。ⓖ添口－胴体に水を注入する際に，微細な水虫を濾過する為，明紬でつつみ，縛って使用する。その為ⓗの添水口は必ず外反される。ⓗ添水口－添台の上位部として添水する為に，尖台穴の直径に比べて広径で製作するのが原則である。ⓘ添台－添水口台を支える台で，濾過機能上，上段部が狭くなって，外反した添水口台の下段と固定して附着される。ⓙ添水台－添水口台と添台の附着結合部分の名称をアーナンダ・クマーラスワーミーは流れ（the flow of water）と称している。

三．仏教胎動期のマウリヤ朝の軍持

ベンジャミン・ローランド（Benjamin Rowland）によると「ＢＣ322年から約40年間インド全域を支配したチャンドラ・グプタの子孫であり熱烈な仏教信奉者だったアショーカ王（在位272～232）は，西方のギリシアとイランと交流した。」[7] と記し，「アショーカ王が仏教を自国の領土全域に広布し，仏法をもって国家統治の理念であることを宣布する巨大な石柱は，15ｍをこえ，仏法に関するアショーカの勅令が刻まれている。石に勅令を刻むのはインド固有のものではなくメソポタミア文明に由来するものである。」[8] という。マウリヤ朝の全時代は，アレキサンダー大王の東方遠征以後，ヘレニズムの影響を受けて，古代ギリシア・ローマおよびエトルリア文化がペルシャ地方からインドへ流入していたのである。

陶器においても，インドでは，西方の影響を強く受けたものが現れている。ガンダーラの交通の要衝である「タキシラ」で発掘されたものが，ギリシア陶器六様式の中，アンフォラ，オイノコエ，クラテルなどの陶器が，ガンダーラ様式で変容させたものであった。タキシラの発

掘遺品のなかの軍持は古拙的な構造を持っている。即ち，添水台と尖台が附着したものとして記録されているが，律蔵の記録では双口形軍持遺物として記されている。

(1) マウリヤ朝の軍持形瓶（図－2　ビール丘遺跡軍持形）

図－2は『タキシラ』[9] 第三巻に収録された図版番号123（掲載図面　No. 66）の器形である。古代タキシラ地方の都市遺跡「ビール丘遺跡2地層」[10] から出土したものである。機能上では添水台と尖台が附着され，外観上では軍持の条件を備えている。この器物を古拙的軍持として見る根拠は，細長頸瓶形式であり，長頸の上段部にある蓋の形象が中国唐時代軍持の形式と同一である点にある。蓋の上に背の低い尖台が附着され，その上に水を注ぐための穴があけられ，尖台の機能をもっているのは明らかである。添水台の軸は垂直の角度をもっているが，水を注ぐ機能とは関係がない。胴体に附着された添水台から内部へ貫通する三つの小さな穴は，この器物における添水台の機能を示していることは確かである。添水口最上段の微細な外反は，濾過時，濾過網を使用する軍持の重要な機能を示している。しかし，器物の下段部が破損されたまま出土し，高台の有無を確認することができず『タキシラ』の著者ジョン・マーシャルも第二巻の解説では軍持と見ていない。

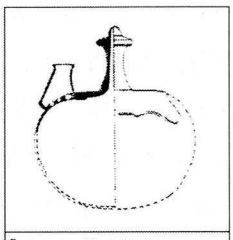


図2　ビール丘遺跡　軍持形

以上のビール丘遺跡軍持形器物を図解して説明すると下記図－3になる。

(2) ビール丘遺跡軍持形瓶（図－3　ビール丘遺跡　軍持形器物の図解）

以上の図解から見て，各部分の形態と機能は唐の軍持形の機能と同じである。したがって，インドの古拙的な軍持とみなすことができる。このような解釈は「ＢＣ６世紀中頃，台頭した

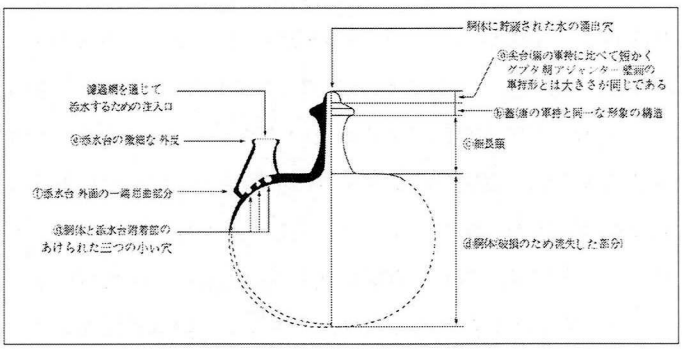


図3　ビール丘遺跡　軍持形器物の図解

ジャイナ教と仏教の殺生禁戒思想」[11] と関連して考えるならば，この器物が濾過機能をもつ軍持であり，また，クシャーン朝時代とグプタ朝のインド軍持の原形であることも明らかであろう。

四．クシャーン朝の軍持

クシャーン朝の陶磁は，ヘレニズム文化の影響を受け，古代グレコ・ローマン様式が強く現われている。技法的には，表面に泥漿を使用する赤絵式，あるいは黒絵式の器物が流行するが，赤絵式の器物が主流となっている。実際に用いられた文様は写実的な表現よりは幾何学的なものが主体であった。軍持形器物の場合，器の表面には文様がないのが特徴であり，陶器の大部分は器の全表面に泥漿が塗られて光沢がある赤色に焼成されている。

ルシーレ・シュルベルク（Lucille Schulberg）は「50年頃，ガンダーラとカブール盆地を占領した中央アジアのスキタイ系クシャーンは，64年，都市国家タキシラを占領し，ＢＣ４世紀からギリシア系，バクトリア王国によって持続的にヘレニズムの洗礼を受け，ガンダーラ地方の主人となる。クシャーン朝の始祖クジューラ・カドフィーセスはアウグストゥス帝時代のローマ帝国と交流し，160年頃カニシカ１世が結集した仏教会で，仏陀の形象を重視する大乗仏教の部派が形成された。」[12] と記している。大乗仏教の観音思想により，済度具現の方法として仏像が造られるようになり，各種の荘厳具が使われたのである。軍持は仏教の象徴的な器物となり，また僧侶の持物として普遍化され，日常化されるようになった。クシャーン朝の全時代を通じて製作された軍持の尖台・添水台遺物などが，「インド全地域から発掘されている。」[13] インドで蒐集された資料を提示すると，下記の通りである。

(1) カウシャーンビー軍持

（図－４　カウシャーンビー軍持遺物資料，デリー・プラーナ・キラー博物館所蔵）

陶器の表面には赤色泥漿を使用しているが，表面の色がやや暗く見える。泥漿が剥がれて胎土が現われている。大体は，粗野な表面様相は泥漿技法に問題があったことが解る。ⓐ形は15㎜の比較的高い尖台をもっており，ⓑ形は５㎜の底い尖台，ⓒ形は尖台が破損している。つまり，唐軍持に比べて尖台が短かく，排水口が細くなっているのが特徴である。ⓓ形は蓋の部分と尖台部分がないクシャーン朝時代の細長頸瓶の頸部である。ⓔ形の尖台は，蓋の直経が85㎜になる大形尖台として，釈迦の生存時の持ちものであったと言う。その大形軍持に関する玄奘の記録と照合すると，アジャンター26号窟涅槃像の軍持の大きさは同一である。

ウッタル・プラデーシュ州，アラハーバードに位置した遺跡地カウシャーンビーで1949年から1967年まで発掘調査された遺物の中に，破片となった軍持の重要な部分が蒐集されてい

る。図で提示すると下記のとおりである。

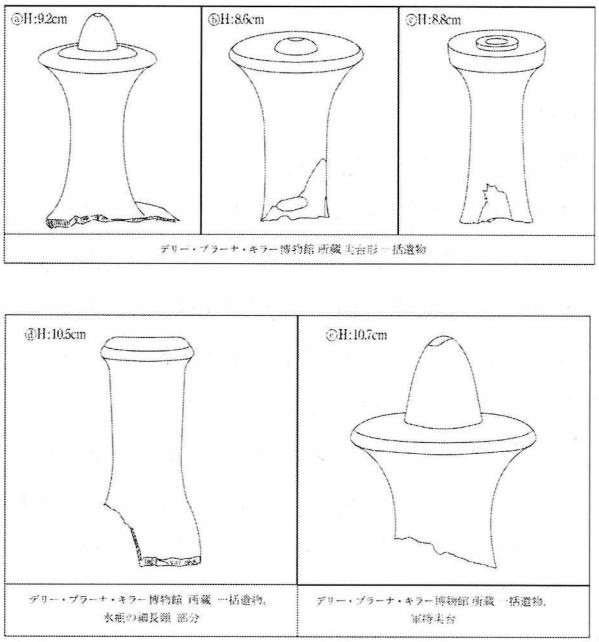


図4　カウシャーンビー

(2)　サーンチー軍持（図－5　サーンチー軍持遺物資料，サーンチー考古学博物館所蔵）

器表面の赤色泥漿技法は完璧であり，特に表面の色は光沢が出る赤色陶器である。ⓐの形は唐の白磁や三彩に焼成された軍持の典型であり，胴体は，肩部の形を見ると広肩形瓶として推測される。ⓑ－Ⅰは洗練されていない添水口の形であり，ⓑ－Ⅱは添水口の頸がⓑ－Ⅰに比べると長く，洗練した形として唐時代の添水台形と類似している。

(3)　ラージガート軍持

（図－6　ラージガート軍持遺物資料，デリー・プラーナ・キラー博物館所蔵）

ⓐはより長い頸の形であり，蓋の上部にはひじょうに小さい尖台がついている。赤色泥漿を表面に塗って焼成していたが，現在，遺物の大部分は泥漿が剥がれて胎土が露出している。ⓑ－Ⅰは，5世紀初めに製作されたと推定され，グプタ朝時代のダルマラージカーで發掘された軍持の添水台形と同じように，人間のあごと類似した形をしており，添水口がダルマラージカー軍持に比べて古拙である。添水台と胴体の間に田の形状をした水を濾過する装置になっているのが特徴である。ⓑ－Ⅱは，黒色泥漿を部分的に塗って焼成した器物の添水台形である。

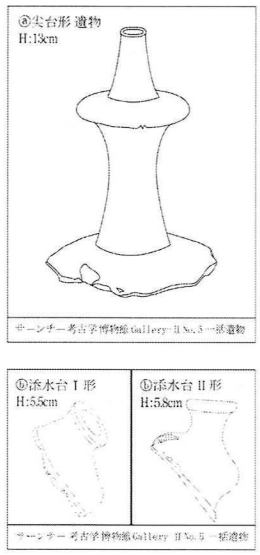


図5　サーンチー
考古学博物館所蔵　軍持部分資料

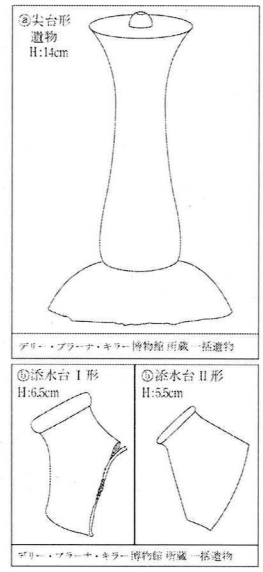


図6　ラージガート

(4)　ソームナート軍持

（図－7　ソームナート軍持遺物資料，デリー・プラーナ・キラー博物館所蔵）

比較的光沢がある赤色陶器として，尖台形はルパールのものと同一である。添水台は精巧に作られ，水羅機能に合うように添水口がやや外反されている。添水台を正面から見ると，その形の中央部分に鋭い垂直線を中心に左右対称になっているのが特徴であり，赤色の光沢はグレコ・ローマン型の色相に比べても劣らない。

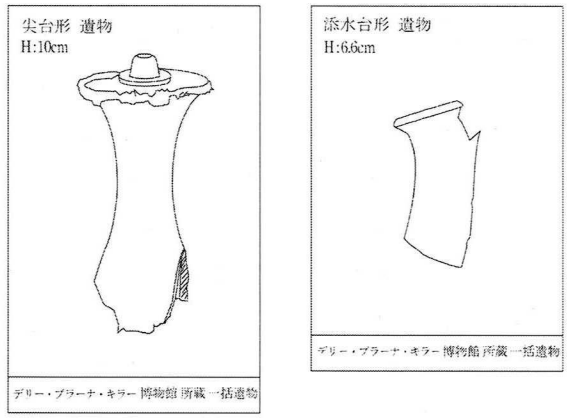


図7　ソームナート

(5) ルパール軍持

（図－8　ルパール軍持遺物資料，デリー・プラーナ・キラー博物館所蔵）

赤色泥漿を使っているが光沢がなく，カウシャーンビー遺物と同じく表面技法が粗野である。ⓐはボリュームがなく矮小な尖台をもっているが，蓋と頸部は唐時代の典型的軍持と類似している。ⓑは円筒形の尖台と長頸部をもち，比較的直経が細い蓋はアジャンター26号窟の涅槃像に見られる大形軍持とその形が似ている。　上記の図に示す遺物はクシャーン朝の時代に流行した軍持形として，主にインドの西北地域とは離れた所であるカウシャーンビーとインド中北部のサーンチーから出土した遺物が大部分であり，それ以外にもインドの全地域で製作されたことがわかる。インドの西北地域のガンダーラは，インドのヘレニズム文化の中心地であり，カウシャーンビーとサーンチーはガンダーラ地域から離れた場所であったことを考えると，西方の陶器がガンダーラ地域を通じてそれぞれの地域に伝わってきたものとして見るのが妥当であろう。しかし，クシャーン朝時代のガンダーラ地域では軍持遺物がまだ発見されていない。

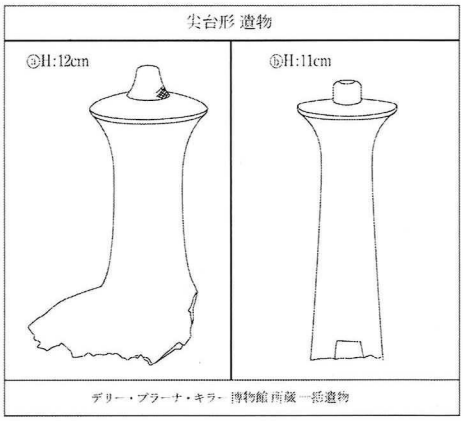


図8　ルパール

五．グプタ朝の軍持

ベンジャミン・ローランドによると，グプタ朝は，320年，インド東北部のパータリプトラを都とし，始祖のチャンドラ・グプタ以後，断続的に行われていた征服事業を通じて，北インド全域を統一した。5世紀中頃には「白フン族」[14] の侵入によって一時的断絶があったが，647年までの3世紀間，インドの北部と中部地方で文化を開花させた。また，中国の求法僧・玄奘の記録では小乗仏教と大乗仏教がともに繁榮していたことが記されている。ナーランダーでは，大乗仏教の大学がある程度隆盛したが，ヒンドゥ教が勢力を拡げ，「ヴィシュヌ」神が崇拝の主な対象になったため，仏教は教理的にヒンドゥ教に同化され，インドの仏教は消滅した時代であった。インドはマウリヤ朝からグプタ朝まで，13世紀にかけて漸進的に仏教文化を発展させ，「すべての芸術分野で所謂インド古典主義といわれる文化を創造した。この時代にインド芸術は様式と図像，均衡と調和を成就し，全インドに歴史上完全な規範を確立したので，グプタ朝の芸術はインド古典期の芸術とよばれる。」[15]

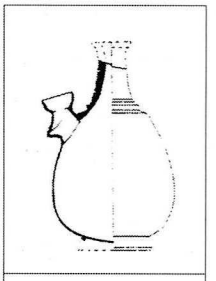
(1) グプタ朝時代の軍持

マウリヤ朝以後，各時代にわたって漸進的に変遷した宗教状況によって必然的に変貌してきた軍持は，①工芸的技法である轆轤成形によって作られ，②石窟の仏像彫刻の左手に把指され，③石窟壁画の絵画の中に描かれるようになった。5世紀半ば以前に製作されたものとしては ⓐ タキシラのダルマラージカー遺跡で出土した添水口，外反形の添水台をもつ軍持があり，ⓑ 5世紀末頃に完成されたアジャンター石窟16号窟の左側の壁面に描かかれた軍持，ⓒ 6世紀末頃に完成されたアジャンター26号窟の左側壁面に彫刻された涅槃像の持つ軍持，ⓓ グプタ朝と仏教の衰退期の7世紀に作られた，エローラ8号窟の尊像の左手に把られた軍持等の遺物によって，グプタ朝時代の軍持の類形が把握できる。

以上のグプタ朝時代の重要軍持遺物を次の図面に例示する。

(2) タキシラの「ダルマラージカー軍持形」[16]（図－9）

図－9の図面の左側に附着された添水台の添水口部の外反は，唐代の軍持と同一であるが，添水台形は人間の顎を想起させる形が一段屈曲し，唐の軍持とは相違を見せる。器下段部の高台も，唐の軍持とは同じ外高台形式である。器上段部の欠損で尖台の有無は確認できない。図面の左側頸部の断面の黒線が上昇しながら漸進的に太くなる。図から推測すると，尖台があった器物であったことがわかる。従ってこの瓶は，図面に示すように細長頸瓶の形式の口縁部をもっているものではなく，尖台が器の上段についていたものといえる。　添水台が必然的に尖台を同伴するという軍持形式の特性から予想して見ても，尖台がある器物だったことは確かである。このことを裏付けるのは中国の僧侶，法顕がインドを巡礼した5世紀初め頃は，タキシラがまだ繁栄していた都市だったので，ダルマラージカー寺院ではおそらくこの器物が使用されたと考えられる。



『タキシラ』第三巻
図版 番号123 参照
（掲載図面No.67）/T-b
地層：ダルマラージカー
（31.28mの地面下）
S：(H) 22.9cm
粘土：灰白色素地
特徴：梨形の添水台がある瓶
人のあごの形の添水台頸部が長細い

図9　ダルマラージカー軍持形

(3) アジャンター16号窟の「難陀」[17]の出家物語に表現された軍持形

グプタ朝の古典文化が隆盛したヴァーカータカ朝ハリスナ王（在位　462－481年）時代にかかれたアジャンター石窟c16－7d壁画左廊「難陀出家物語」右中段に描かれた一組の双の浄瓶中左側の瓶は軍持である。（図－10難陀出家物語壁画）

図－10ⓐ右側の中段の二個の柱の中に見られる浄瓶一双の形態を拡大すると図－10ⓑである。

図－10の壁画に描かれた瓶の材料が陶製と仮定すれば，原形は回転轆轤を使用して成形したため左右対称の形になる。従って，この二個の瓶の原形を復元すると図－11になる。

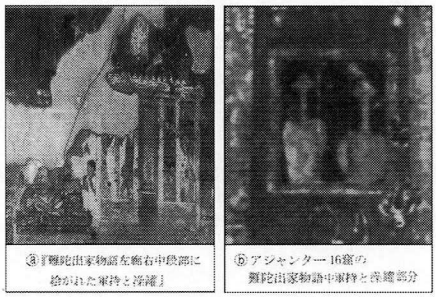


図10　難陀出家物語壁画

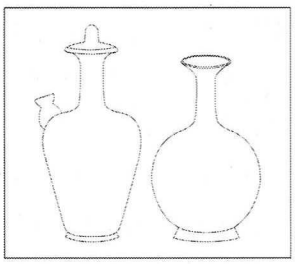


図11　工芸的技法として整型化した
図10－ⓑの図象（面）

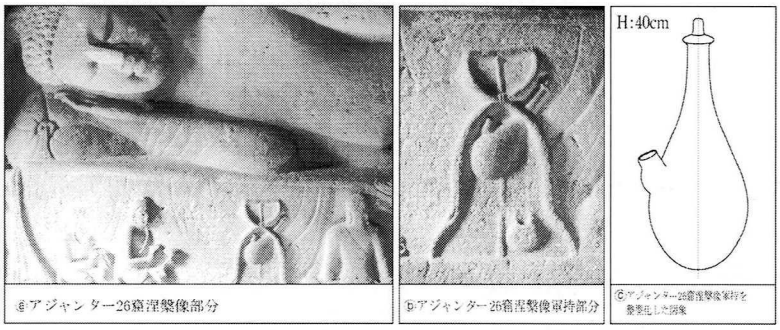
左の添水台と尖台が附着された軍持形浄瓶は，広い肩形でダルマラージカー軍持図－９とは胴体形に差異がある。このような現象はグプタ朝の５世紀頃に，軍持が梨形と広い肩形の２種があったことを示している。右の細長頸瓶は，壁画の剥落によって尖台があるもののように錯覚されるが，実際には細長頸瓶である。この時代に出家の為には軍持と細長頸瓶（澡罐）が必要であったことが想像される。

(4)　アジャンター26号窟の涅槃像（図－12ⓐ・図－12ⓑ・図－12ⓒ）

６世紀末頃に建立されたアジャンター26号窟の内壁には，仏の涅槃の場面が，浮彫であらわされている。この壁面に見られる軍持の胴体形は，ダルマラージカー軍持形と同一で，梨形で大体下広形である。これは５世紀中頃以前に製作されたとされているダルマラージカー軍持と同一の胴体形を見せるので，グプタ朝全時代を通じて下広形軍持がインドで製作されていたことがわかる。軍持が紐でしばられて壁面に45度の角度でななめにかけられている状態が，添水台と尖台の構造を情密に表現している。ダルマラージカー軍持形に比べて高台が省略された点と，添水台の角度が外反されていて，尖台の形象が変形されていた点は，上の図－10の絵画的表現に見られるのと同様の省略表現である。これは，壁面に描かれた主題が涅槃の釈尊仏であるため，細部描写が省略されたと推測される。このような見解から，おそらくこの涅槃像の軍持の添水台はダルマラージカー軍持と同一形として考えることが可能である。

図－12アジャンター26窟の涅槃像の軍持は轆轤で作ったものと推定される。図式すると図－12ⓒになる。

底に高台がなく，丸いものは移動時に水瓶を持ち歩くように袋に入れて紐をつけて肩にかけたり，壁や木にかけたからである。平面におかない用途で作られたもので高台がない。５世紀



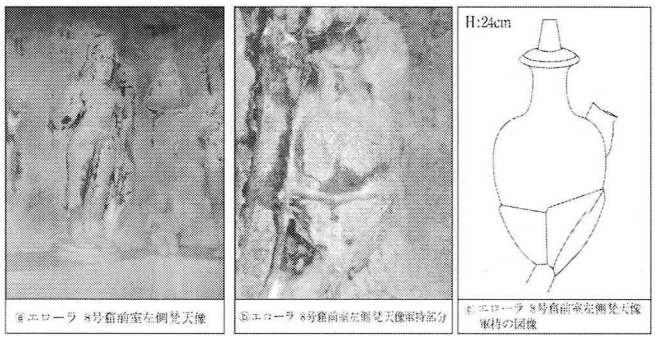
ⓐアジャンター26窟涅槃像部分　ⓑアジャンター26窟涅槃像軍持部分　ⓒアジャンター26窟涅槃像軍持を整型化した図像

図12ⓑを整型化して軍持で復元すると図－12ⓒになる

中頃以前に製作されて使われた，ダルマラージカー軍持と共に梨形で，グプタ朝時代に流行した軍持であり，紐である空間にかけて吊す軍持形の典型的な遺物である。釈尊仏の入寂時，哀悼する弟子たちとともに寝床の前面壁にかけられているのである。5世紀のグプタ朝時代の「荘厳具」として軍持の重要性を示唆している。上の図－12ⓑの軍持下段部に見える袋は「濾水嚢」または「水羅嚢」で，僧侶が修道のため行う頭陀行時の持物の中の一つである。

(5) エローラ8号窟梵天像の軍持（図－13）

仏教の衰退期である7世紀の後半に製作された最後の仏教石窟が遺跡エローラ8号窟である。その前室の左側の龕室に描かれた梵天像は女性像とともに立っている。この梵天像の左手に把持されていたのは軍持である。図として提示すると下記のようになる。軍持の下段部が蓮葉で包まれているのを見ると，前述の涅槃像の軍持とともに高台がない卵形の胴体として把握され，頸部が細長頸形式で太くて短かい形式になっているのが特徴である。この梵天像の製作年代から見ると，「義浄」[18] のインド訪問の時期（675－695）と一致する。胴体形が広い肩卵形である唐代に製作された一連の白磁軍持形と同じ形態であることを示している。即ち，7世紀末頃



ⓐエローラ 8号窟前室左側梵天像　ⓑエローラ 8号窟前室左側梵天像軍持部分　ⓒエローラ 8号窟前室左側梵天像軍持の図像

図13　エローラ8号窟梵天像の軍持

の軍持の唯一の資料であり，中国唐代の軍持との関連を示す重要な遺品であることを指摘しておきたい。

おわりに

唐代に流行した持物であり，僧侶の生活必需品としての添水台・尖台附着形軍持浄瓶は，アーナンダ・クマーラスワーミーが1920年代に発表した論文の中には，インドにある軍持の原型に関する簡略な言及はあるが，詳細に資料を提示したものではない。

本研究では，ＢＣ３世紀末マウリヤ朝時代のジャイナ教や仏教の思想と関連がある軍持や，大乗仏教が台頭したクシャーン朝時代，あるいはインド仏教の最盛期であるグプタ朝時代の遺物資料を蒐集して提示した。尖台および添水台附着形軍持の成立は，浄水を採取するための特別な構造で，食用水に浮ぶ微細な虫を濾過する発想は殺生禁忌の仏教思想から始まったのである。このような理由で，ＢＣ３世紀マウリヤ朝から使用され始めた軍持は，仏教衰退期の７世紀までインドで流行した器物だと思われる。浄水採取方法は，義浄の『南海寄帰内法伝』[19]の「水有二瓶」條に仔細に記録されている。アジャンター26号窟の涅槃像に現われている軍持と濾水嚢は，水羅水または濾羅水の重要性を記念碑として象徴化したことで，この時代に軍持が仏者の日常的容器として普遍化されていたことがわかる。

サーンチー考古学博物館，デリー・プラーナ・キラー博物館，マトゥラー博物館，パトナ博物館所蔵の軍持の尖台，添水台破片などは紀元前後のクシャーン朝の時代にすでに軍持形が工芸的轆轤技法で定形化されていたのを証明している。

アジャンター16号窟の壁画資料を通じて，広い肩形軍持と澡罐（卵形細長頸瓶）の定型を知ることができる。26号窟の浮彫りされた涅槃像と，前章のダルマラージカー軍持（図９）の下広形軍持は，インド古典期にどんな形状として規範化されていたのかを見せてくれるものである。

アジャンター16号窟の広い肩形軍持は，唐代の軍持に影響を与えたので，宋代と高麗時代にも非常に流行した。しかし，唐の初期中国形陶磁軍持にはこれらの形はほとんどなく，卵形軍持が大半である。これは唐の卵形軍持が中国形の定型化であったと言える証左である。８世紀に入って唐代の中国に定着した軍持形は，グプタ朝軍持を原形とし，次第に中国化されていった。８世紀のインドでは軍持の形体が変化し，第五章で言及したように，インドの宗教がヒンドゥ教を主流とするようになり，仏教がインドから消えていったことと深い関係があると言える。現在，インドの軍持遺物の資料がほとんどないのは，低温で焼成された土器のため，破損が甚だしいという理由もあるが，主な原因は７世紀以後仏教の衰退と同時に，インドでは軍持を生産しなくなったことと関係する。

以上のように，唐軍持の原型であるインド軍持の時代的，地域的，様式的特徴を，陶磁軍持を中心に研究した。本研究はインド軍持の①起源②展開③中国に伝わった時期に関する内容を通じて，インドでは陶磁軍持が時代と地域によって，どんな形式へと変貌し，完成されたかを大まかに提示したものである。

今後，インド全地域の軍持遺物をより幅広く，インドの習俗的，地域的，文化的，気候的要因による軍持形の特徴を研究し，またインドの軍持が唐時代に中国の西安と洛陽地域に伝わった経路と唐軍持製作の動機，時期，遺物の特徴に関して研究を深めていきたいと考えている。

註

1）6世紀中頃にインドのヴァルダマーナに依って創始された宗教で，殺生禁忌および無所有と輪廻の宗教観をもっている。

2）拙稿「高麗浄瓶の様式変遷とその特徴」意匠学会誌　Design 理論35　p. 16　1996年

3）本稿　p. 3　図－1

4）『一切径音義』慧琳という唐代の僧が書いたインドの言葉を漢語に記録する時音訳の内容を解説した仏径。全部100巻になっている。これは第59巻の内容・慧琳音義ともいう。

5）アメリカ・ボストン博物館の学芸員として勤めた。『History of Indian and Indonesia Art』の著者 1927年

6）濾過網を使用して水中の微細な虫を排除する方法あるいは機能。『大正新脩大蔵径』第24巻・律部三　1451「根本説一切有部毘奈耶雑事」p. 266a　大正新脩大蔵径刊行会・東京・大正15年

7）ベンジャミン・ローランド『インド美術史』PP. 48-49　図書出版　芸茎　1996年

8）Ibid, PP. 54　図書出版　芸茎　1996年

9）イキリス人，ジョン・マーシャル（John Marshall）のタキシラ地域を発掘した報告書。
『TAXILA』第一・二・三の3巻になっている。Cambridge University Press　1951年
『タキシラ』第三巻には発掘現場の図面，写眞，遺品の図面等が記録されている。

10）タキシラの①シルカブ②シルスクとともに都市遺跡，第2地層はマウリヤ朝時代の遺物層である。

11）ルシーレ・シュルベルク『Great Ages of Man Historic India』PP. 55-56
編纂：Time-Life Books INC，韓国一報新聞　1979年

12）Ibid, PP. 115-120

13）インド地図（下記参照）：❶—❺の表記は本論文の資料として使ったインド軍持遺物発掘地域を示す。
❶ソームナート，❷サーンチー，❸カウシャーンビー，❹ラージガート，❺ルパール，●パートナ

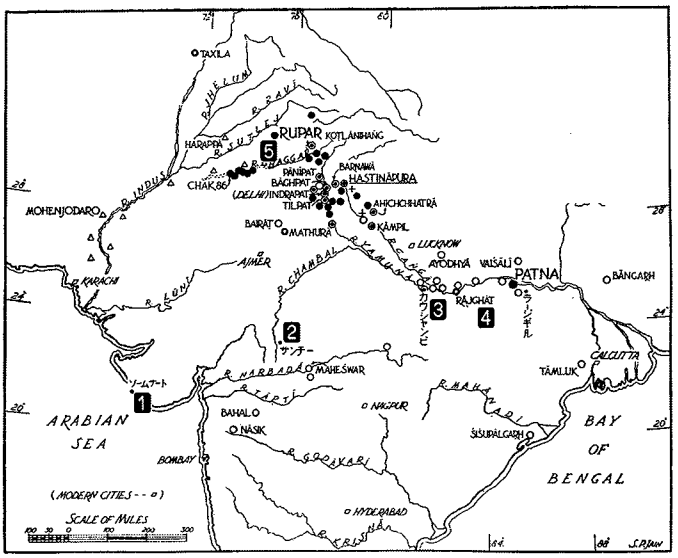
14）中央アジアのトルク系の遊牧騎馬民族，5世紀中頃（560-570年）中央アジアから数回にわたってグプタ朝下のタキシラ地域を侵略し破壊した民族。

15）ベンジャミン・ローランド『インド美術史』P 196　図書出版　芸茎　1996年

16)『タキシラ』第三巻に収録された図版番号123（図面掲載　No. 67土器軍持）は寺院遺跡であるダルマラージカーから出土された。第二巻の PP. 44-66に詳細した内容が記録されている。

17) 釈尊の異腹弟で仏教に帰依して釈尊の弟子になった人物。

18) 唐の求法僧で671年海路でインドにわたって大乗仏教の大学があった那爛陀で675-685年まで10年間学習した。律蔵研究に依る資料を多く残して『南海寄帰内法伝』を著述した。

19) 義浄の『南海寄帰内法伝』は，インドネシアのスマトラで記述，唐の使臣便で皇帝に献上したと言われ，僧侶たちの持物に関する研究がきわだっている。僧侶たちの日常の戒律を中心として，特に「水有二瓶」條で浄瓶に関して形態と使用法および製作方法が詳細に記述されている。

註13）インド地図